



## 社会的養護を考える

### ～小規模施設の取り組みの実践から見えてくるもの～

中日青葉学園副学園長 わかば館 館長 近藤 日出夫

昨年度「朋」6号の特集においては、地域小規模グループとグループケアと題して、研究的視点から小規模化を進める中で予測される課題や問題について大学の先生方から提言を頂きました。7号は実際に地域小規模児童養護施設を含め、小規模化に切り替え長年取り組んできた児童養護施設の実践例から現場の声を届けることにしました。

人員配置の問題やそこに働く職員の負担など心配される事柄が完全に払しょくされた訳ではありませんが、小規模化したことでまた、数多くのメリットを生み出してきたことも見逃せない事実です。

そもそも「当たり前の生活」を子どもたちに提供していくためにはハード面から変えていかなければなりません。子どもたちが生活する場所を一般家庭のそれに近づけることから始めますが、もう一つ大切なことは生まれた時から家族として育まれた子どもたちとは違って、さまざまな生活課題を抱えた家族の元から分離され保護された子どもたちが暮らす場所ですから、当然ながら小さいとはいえ他人同士が共に生活をしていくための配慮なり、気をつけなければならない約束事が存在します。また地域小規模施設等で働く職員は親代わりの側面と事務的な処理能力やコミュニケーションの力、地域の一員としてのさまざまな取り組みに対しても前向きに捉えて参画することが求められ、その積み重ねが地域との絆を深めていくものだと思います。

そのため7号では愛知県が進める社会的養護推進計画に基づき、小規模施設で働く職員のアンケートも視野に入れながら可能な限り前向きな取り組みを紹介する中で、私たち施設職員が小規模化することで、変化していく子どもたちの前向きな姿勢や周りへの気遣いなど、家庭的な生活を通じて職員と子どもたちの程よい距離感の習得や日々の小さな取り組みの連続性から例えば食事作り等を身近に体験することで、より現実的な生活を学ぶことができ「自分にもできた」「やってみたい」という達成感を毎日の生活から体得していく意義はとて大きいと思います。

自己肯定感を育てるために、今まで経験しなかった子どもたちの内面的変化につなげられるようエンパワメントを引き出す取り組みを展開していかなければなりません。ここに実践されている愛知県内の地域小規模施設の実践の取り組みを紹介する中で、参考にして頂けることを期待しております。

また、他府県の先進施設の小舎制の取り組みも紹介していきたいと考えています。従前の大舎制の育みでは、やらされているという考えが主体となり自分たちの生活の場という共感意識が欠けていることが、職員の思いを感じ取るまでには至らず問題行動につながっていった部分もあるのではないのでしょうか。

戦後日本は欧米に追い付き追い越せで走ってきました。物質的豊かさでは今や世界に冠たる国となりましたが、内面の豊かさという点では疑問符がつくように感じております。同じように児童福祉施設も半世紀をかけて物質的には豊かになってきましたが、内面的な成長につなげる取り組みはまだ、これからというのが私の率直な意見です。